

うつくし、

横浜市民ギャラリー
コレクション展
2020

描かれた

港と水辺

Landscape of Harbor
and Waterside,
Mainly in Yokohama

横浜市民ギャラリー
Yokohama
Civic Art Gallery

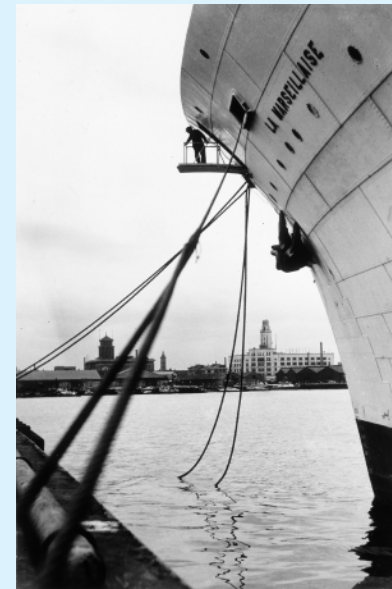
ごあいさつ

横浜市民ギャラリーには、約1,300点の所蔵作品があります。これらの作品の多くは、1964年の開館以来、企画展や国際展などの機に収蔵されたものです。特に国際展の折には地元作家を中心に横浜の風景を主題として新作を依頼することがたびたびあったことから、横浜の風景を描いた作品が当館には数多く見られます。今回はその中でも、港や海、水辺を描いた作品を特集します。

横浜港をはじめ、外部との玄関口、物流の拠点である港、古くから絵画や文学で題材となってきた水辺は、人びとの生活に密着する存在であり、また一方で郷愁の対象にもなります。本展では、横浜を中心に港や水辺をうつし描いた油彩、日本画、写真、版画など約50点をご紹介します。技法や作家による表現の違い、時代の変遷などをお楽しみください。

最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた関係者、関係機関の皆様にご心より御礼申し上げます。

横浜市民ギャラリー



- 1 五十嵐英壽《ハマの三塔》1953年
ゼラチン・シルバー・プリント 47.6×31.9cm
- 2 浜口タカシ《最後の移民船》1973年
ゼラチン・シルバー・プリント 36.7×49.9cm
- 3 奥村泰宏《出航の見送り》1955年
ゼラチン・シルバー・プリント 52.5×34.0cm
- 4 常盤とよ子《赤線地帯—横浜》1955年
ゼラチン・シルバー・プリント 25.4×39.1cm

写真でみる戦後—昭和のミナト 横浜

横浜港は時代とともにその役割やかたちを変え、仕事や旅のため港に集う人びとや周辺に暮らす市民と密接に関わってきました。報道写真家として時代の推移を見守った五十嵐英壽(1931年生まれ)や浜口タカシ(1931-2018)は、発展を続ける港に寄港する船や、出立・到着する人びとをつぶさに撮影しました。奥村泰宏(1914-1995)、常盤とよ子(1928-2019)の夫婦は、進駐軍の接收下でたくましく生きる市民や、彼らと対照的な立場にある軍側の人物を、港をはじめとした当時の横浜の風景とともに撮影し、同時代の横浜のあり様をうつとりしました。小野肇(1913-1999)や西村建子(1940年生まれ)らは、高度成長にともない貨物の取扱量が増加したため増築された本牧ふ頭や、1989年に開通した横浜ベイブリッジの建造中の様子、また現在でも開発が進められているみなとみらい21地区など、横浜の発展を象徴する建築群や、その林立で一変した横浜港の風景をダイナミックにとらえています。





5

5 小野肇《建設中のベイブリッジ》1988年
 カラー・プリント 56.3×46.0cm
 6 西村建子《横浜港》1988年
 カラー・プリント 36.5×54.5cm



6

描かれた横浜港 1940～80年代

当館所蔵作品には横浜港を描いたものが多数見られます。多くの作家を惹きつけたモチーフは、故に多様な表現を生みました。岩田栄之助(1899-1985)の《終戦後の横浜港》では、フランス領事館を中心に、画面上方に横浜港が描かれています。1953年に建造が開始された山下ふ頭の姿はまだありません。天笠義一(1921-2007)の《横浜港》では横浜三塔の一つ、クイーンの塔(横浜税関)や赤レンガ倉庫などの位置が画面の中で再構成されています。画中の白い絵具の施された部分は地面にも水面にも見え、不思議な印象を与えます。

水彩作品はいずれも1979年に開催された横浜開港120周年記念「横浜百景展」の出品作です。同展では地元の画家が横浜市内の風景を写生した新作を発表しました。鉛筆と水彩で港の見える丘公園をスケッチした遠藤典太(1903-1991)、墨を用いて家並みや高速道路の向こうに見える横浜港を見下ろす風景を描いた古川益弘(1931年生まれ)。当時の横浜港の多面的な姿が見えてきます。



7

7 岩田栄之助《終戦後の横浜港》1947年
 油彩、キャンバス 65.6×80.5cm



8

8 天笠義一《横浜港》1982年
 油彩、キャンバス 97.8×130.8cm
 9 遠藤典太《港の見える丘公園(2)》1979年
 鉛筆、水彩、紙 24.3×35.1cm
 10 國領経郎《完成近いベイブリッジ》1988年
 油彩、キャンバス 80.4×116.7cm
 11 古川益弘《高島台より港を望む》1979年
 墨、水彩、紙 23.8×32.2cm



9



10



11





12 林敬二《横浜港》1988年
油彩、キャンバス 91.0×116.0cm
13 三橋兄弟治《港にて》1940年
水彩、紙 57.0×74.7cm
14 田中岑《窓外港朝》1988年
油彩、キャンバス 72.7×60.8cm
15 榎庭彦治《横浜・山手（外人墓地と港）》1963年
油彩、キャンバス 111.8×161.3cm



水辺と人びと

港や水辺に集う人の目的はさまざまです。働く人、旅立つ人、見送りを
する人、散歩する人。水辺にて人は何を思うのでしょうか。林敬二(1933
年生まれ)は人物と浮遊感ある抽象的な空間とを組み合わせた画風で知
られますが、《横浜港》では横向きの女性とともに建設中の横浜ペイブ
リッジを遠方に臨む風景が、具象的ながらも林らしいアレンジを加えて
描かれており、林の作品群の中で他に類を見ない表現となっています。
三橋兄弟治(1911-1996)の《港にて》は1940年の作品です。前年ヨー
ロッパで第二次世界大戦が勃発し、日本も翌年参戦に向かうという
世相下ですが、港に停泊する船を背に会話を交わしているようにも見
える3人の人物の様子は、晴れの日のだこな雰囲気を感じさせます。
田中岑(1921-2014)の《窓外港朝》には人物が描かれていませんが、窓
の前に座り、外の風景を眺める作家自身の存在を想起させます。

特別展示

牛田雞村の描いた横浜—開港期の風景

牛田雞村(1890-1976)は、横浜市中区南仲通に生まれました。本名を治(はる)といいます。1907
年より日本画家の松本楓湖の下で絵を学び、巽画会や紅児会に出品し次第に頭角をあらわしま
した。1913年頃より実業家の原三溪(本名・富太郎)の援助を受け始め、翌1914年に第一回再興院
展に《柳》を出品し院友となります。同年末、日本画の革新を目指す同門の先輩・今村紫紅は、
雞村をはじめ速水御舟、小茂田青樹ら若手画家とともに東京・目黒で赤曜会を結成します。雞村
は他の会員とともに写生や研究、野外展覧会の開催などに勤しみましたが、1916年紫紅の急逝
とともに同会は解散。雞村は紫紅の逝去にたいへん落ち込み、心配した三溪が出資し1917年に
朝鮮半島を旅行、三溪園には当時の日記とスケッチが残っています。

雞村は赤曜会時代の紫紅の南画
風の作風や、御舟が1920年頃より
取り組んだ細密描写などに影響
を受けながら、次第にやまと絵の
色彩やかたちに細微な描写を取り
入れた自身の表現を確立させてい
きました。しかし発表数は多くなく、
1946年の院展出品を最後に画壇
を去り、その後は舞台美術を手が
けました。

「蟹港二題」は1926年の第13回再
興院展の出品作です。《関内》も当
初は《葦街の夕》《蚕船の泊》と
一緒に出品を構想していたと思わ
れます。3作はいずれも開港期の
浮世絵などに取材した、発表当時
においてもノスタルジーを感じさ
せる風景が描かれています。1923
年の関東大震災で被災した横浜の
惨状を眼にした雞村が、故郷の復
興と発展を願って制作したと考え
られています。



16 牛田雞村《葦街の夕(「蟹港二題」より)》1926年
絹本着彩 63.0×112.8cm
17 牛田雞村《蚕船の泊(「蟹港二題」より)》1926年
絹本着彩 62.1×112.9cm
18 牛田雞村《関内》1926年
絹本着彩 63.4×100.5cm

港と水辺 アラカルト
 ー 版画と漫画の多様な表現

版画は木版や銅版などの主要な版種がよく知られますが、作家が創意工夫し技法を研究し、版と向き合うことから個性的な表現が多く生まれます。柴田昌一(1935年生まれ)はエッチングやアクアチントで漆黒の夜空を背景にみなとみらい21地区を描きます。巨大な月や手前の不思議な草木、幾何学的な構造物、そして浮かぶ船などを同居させ、幻想的な風景に仕上げています。由木礼(1928-2003)は、輪郭線を引かず複数の版を淡い水性インクで刷り重ね、空や海の色グラデーションや、中央にそびえるタワー、海岸沿いの道路までも、やわらかにあらわしました。

版の上で試行錯誤を重ねる版画と対照的に、漫画作品は1978年の「ヨコハマ漫画フェスティバル」にあわせて展覧会直前に出品作家32名を一堂に集め、即興に近いかたちで描かれました。同展の中心人物・柳原良平(1931-2015)は、制作に際し作家に示した制作テーマのひとつ、横浜事始めを取り上げ、税関の前身である運上所や領事館が建ち並び、輸出入で賑わう開港期の横浜の様子をユーモアを交えて描いています。



- 19 柴田昌一《MM21(A)》1988年
 エッチング、アクアチント 29.2×37.9cm
- 20 由木礼《MM21 Plaza》1988年
 木版(水性多色刷り) 64.7×46.6cm
- 21 萩原英雄《港風景》1988年
 木版 60.9×46.4cm
- 22 ちばてつや《暗闇に黒船》1978年
 水彩、マジック、木、糸、紙 72.6×102.7cm
- 23 柳原良平《運上所と英一番館》1978年
 ポスターカラー、紙 72.1×102.4cm

interview

当館では2014年より、企画展にあわせ横浜市民ギャラリーにゆかりのある方々のインタビューをおこなっています。今回は出品作家の西村建子氏、林敬二氏にお話をお聞きしました。

※インタビューは映像化し、展示会場で上映します。また、横浜市民ギャラリーホームページ上で公開する予定です。

西村建子 インタビュー

2019年12月23日
横浜市民ギャラリーにて
聞き手・編集：齋藤里紗



—写真の道に進んだ経緯

浜口タカシ先生(1931-2018)が横浜で写真学校¹をされていると知り、1978年から通いました。それまでは東京で事務の仕事しながら写真を趣味でやっていました。近所の親戚な写真屋さんに教わりながら。でもやはり学校に行って勉強したいと思ったのです。そのうち片手間では写真はできないと思い、横浜に引越して浜口先生の事務所を手伝いながら、写真学校の仕事もするようになりました。小さな学校でしたが、とても家庭的でいい学校でした。学校には夜間部もありましたから、朝から晩まで写真のことばかりになりました。

—師・浜口タカシ氏の写真と自身の写真

私は浜口先生の報道写真に憧れて写真の道に入ったようなところがありましたが、私自身は浜口先生のように視野を広く持って歩けなかったので、横浜を中心に撮っていました。今では「横浜の西村」みたいな感じになっていますが、本当は報道も自分でやりたいぐらい好きでした。

—中国残留孤児の撮影

当時は残留孤児が年に何回も来日していました²。その撮影に浜口先生が入っていたので、私もついて行って記録していました。そのうち残留孤児たちがどんな家に住んでいるんだろうと興味が湧いてきて、残留婦人や、残留孤児のご両親のことなど、色々なことが分かってきました。浜口先生は日本で、私は中国に行って取材する、そういうことで中国に行くようになりました。中国に残留孤児の件で渡ったのは7回程です。1985年、元軍人の人たちが旧ソ連国境の地で慰霊祭をやるという話があり、当時はなかなか個人では入国できない時代でしたので、一緒に連れて行ってくださいとお願いし、その人たちと

中国に行きました。道中、彼らが車の中で色々なことを語るんですね。今でもよく覚えています、車の窓から風景を見て「ここだよ、この辺だよ！」と。元軍人の方は6、7人、みな白髪交じりの年輩の男性たちばかりでしたが、その人たちが当時の話をしながらむせび泣くんです。私ももらい泣きました。

残留孤児の方が当時住んでいた家にも行きました。本当に何も無い、藁葺きの小屋に住んでいます。窓にはビニールが張ってあり、彼はその窓明かりで日本語を練習していました。黒竜江省³は冬が厳しく、氷点下20～40℃になるようなところで、私は冬に行きましたから日本では感じることをできないくらいの寒さでした。部屋には日本から持ち帰ってきたカラーテレビ電気はないんですよが棚の上に置いてある、それを見て何も言えませんでした。会った瞬間は本当に嬉し泣きで、抱き合っただけで久しぶりねと言いました。私たちが行ったら親が日本人だったというだけでとても喜んでくれて、お昼を作って歓迎してくれました。彼らはその後、日本に帰ってきませんでした。というのは自身の子どもがいるし、日本の生みの親は亡くなっている。自分は日本に行っても仕事ができない、言葉もできない。子どもたちは日本に行かせたいけれど、費用がない。だから行かないと。でも日本語は習いたいというので、部屋で日本語は習っていたのです。やるせない思いでした。

こうした写真をまとめた『哀愁の大地—旧満州—』(2015年、shashasha)を発表することになった時、本当はもっと大きな本を出したかったのですが、なかなか出版社がついてくれなくて。今は本を作っても売れない時代なんですね。でも中国のフィルムを寝かせておくのは勿体ないので、ようやくできました。話だけでは想像がつかないので、本にして皆さんに見てもらうためにも。



西村建子
『哀愁の大地—旧満州—』
(2015年、shashasha)より

—自身にとっての横浜

私は写真をやりたくて横浜に来ました。朝に夜に何十年も撮り続けてきました。横浜は私を写真で育ててくれた街で、とても好きです。私の写真集の中には「好きです、横浜」と必ず書いてあります。

みなとみらいは今の街になる前に横浜博覧会⁴がありました。その後みなとみらいとなって、今はもう人気の街です。人気がどんどん膨らんで、桜木町、横浜、周辺もとても大きな街になってきました。私は何十年も横浜でビルができていくのを記録してきましたが、みなとみらいの辺りはすごい建物がいつできたのかわからないうちに増えています。みなとみらいの海側から山下公園にかけて、あの辺の発展を随分よく見てきましたし、今でも好きですね。

—本展出品作《横浜港》、《MM21 夕風》

船に乗る機会がありましたので、横浜の街を船の中から撮ってみたいと思いました。街に建物が増え賑わってきた、それを手前の波を大胆に入れて撮りたいと(p.4、図版6)。それからインターコンチネンタルホテル、



あれは本当にユニークな建物ですよ。今でも目立ちますけども、あの建物ができた時にはみんな憧れちゃったんです。

西村建子《MM21 夕風》1991年
カラー・プリント 39.9×54.7cm

—横浜市民ギャラリーの思い出

前の市民ギャラリー⁵は本当によく通いました。あの場所の前が公園になっていますよね⁶。あの公園がとても好きで、毎週のように市民ギャラリーに行って、何もやってなくても覗いたり。馬車道の近くに住んでいたことがあり、久しくそういう時期がありました。若い時のことです。

—ハマ展での大賞受賞(1986年)

浜口先生は自分の生徒さんたちにコンテストへの出品を勧める先生でした。最初はどのように勧めるのかなと思いましたが、コンテストに出すと賞がきます。賞を取った人は励みになり、それで更に写真を撮ることになります。私は写真を撮る始めて間もない頃にハマ展(横浜美術協会)大賞を取りました。その頃ハマ展大賞は4部門の1位賞金が100万円だったんです。私はちょうど体調が悪くて入院中でしたが、とても驚きました。先生も喜んで「ほら、出さなきゃ100万にならないんだよ」「出せばなるんだよ」と。先生は皆さんが出品するきっかけをつくってくださいました。

—今後撮影したいもの

やはり横浜を撮りたいですね。横浜はどんどん発展しているので、記録すると楽しいんです。まして知っている場所、身近なところ。一緒に歩く写真教室の生徒さんたちにもそんなに遠いところではないので、一緒に歩いて、楽しんでやっていければいいかなと思っています。

—写真を撮ること

写真は理屈ではなくて、その本人が感じたものを表現していくものです。今は誰でもシャッターを切れば写るようになりました。スマホでも撮れるし、コンパクトカメラでも撮れる。今写真を撮らない人は1人もいないくらい。赤ちゃんだけですよ、撮らないのは。皆さん必ずスマホだけでも持って歩いているので、欲しい時に写真が撮れる。そういう意味では昔のように不便なことはなくなりました。写真は自分がしっかりと記録していけば無駄にはならない、非常にいい自分の糧になるものだと思います。だから写真を撮っている人たちには、年を取ってから写真をやめると言いたい。写真を撮っている人がやめちゃうと言葉がなくなってしまふんです。語ることができなくなり、無口になる。いずれ1人になりますが、そういう時に寂しさを紛らされるのは友達である写真ではないでしょうか、写真を撮っていた方には。書道をやっていた方には書道だろうし、趣味を持っていた方はそれぞれ趣味をやるでしょう。ただ写真の場合は機材を持つため、やめちゃうんです。それはとても勿体ないので、スマホでもなんでもいいから、それを利用して表現することを続けて行って欲しいです。表現するためには、考えないとシャッターが切れないですね。だから考えることをいつまでも持っていて欲しいと思います。

- 1 日本写真映像学院。
- 2 1981年から1999年の間、2,000名以上が訪日調査団に参加。
- 3 内モンゴル自治区に所在。省都はハルビン。旧満州国(1932～1945)の一部にあたる。
- 4 1989年3月25日～10月1日に開催。
- 5 横浜市民ギャラリーは1974年から2013年まで中区万代町1-1、教育文化センター内に所在。
- 6 大通り公園(横浜市中区)。

西村建子(にしむら・たつこ)

- 1940年 栃木県生まれ
- 1979年 日本写真家協会JPS展銀賞受賞(1981年)
- 1988年 「横浜・上海友好都市提携 15周年記念 横浜美術展」(横浜市民ギャラリー、上海美術館) ※《横浜港》出品
- 1989年 横浜美術協会会員
- 1990年 「横浜・オデッサ美術交流展」(オデッサ東西美術館/ウクライナ)
- 1992年 「よこはまの作家たち'92」(横浜市民ギャラリー)
- 「横浜コンスタンツァ美術交流展」(コンスタンツァ美術館、国立コレクション美術館/ルーマニア) ※《MM21 夕風》出品
- 1993年 「横浜サンディエゴ美術交流展」(サンディエゴポートコミッションギャラリー/アメリカ、ティファナ国立文化センター/メキシコ)
- 1994年 個展「横浜みなとみらい写真展」(有隣堂ランドマークプラザ店/横浜)
- 1997年 個展「ベイサイド横浜」(赤レンガ倉庫/横浜)
- 2001年 個展「よこはま・YOKOHAMA」(キャンソロン/銀座、福岡)
- 2013年 「東北の旅 浜口タカシ 西村建子 二人展」(みなとみらいギャラリー/横浜)

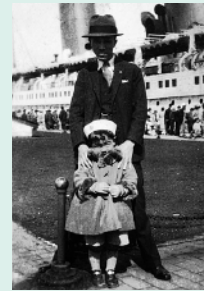
現在、横浜美術協会会員、日本写真家協会会員、二科会写真部神奈川前支部長、バーズ写真教室、若葉台サンディ教室、二科会神奈川支部例会で講師を務める

林敬二 インタビュー

2020年1月8日
林敬二氏アトリエにて
聞き手・編集：齋藤里紗



—幼少期、横浜の思い出



父が蓄音機店のオデオン堂を馬車道でやっていた。横浜では結構名の知られた店でした。市立横浜小学校¹に通い、戦争中は箱根湯本に疎開しました。横浜小学校というのは横浜で知られた小学校で、いいところの少年少女たちが集まってきました。当時は戦後の様に子どもたちが器用に英語を話すとか、そんなことはありませんでしたけれども、なんとなくいつも横浜の港の空気を感じながら育ちました。

—川村信雄画塾

絵に興味を持つようになったのは高等学校に入ってからですね。横浜では川村信雄画塾²が一番有名で、美術大学を受験しようということではなく、絵が好きなのでそちらに通いました。いわゆる受験校ではないので絵が好きな人が集まってきました。先生が非常に優しい人で親しみをもちました。

—東京藝術大学

藝大に入った頃は、みんなが好き勝手にやっている時代でした。戦後のある時期になるとアルバイトをする人も増えたようですが、私の頃はあまりアルバイトは流行りませんでした。それぞれ自分の敬愛する画家や画風を学んで、あとは好きなように仕事をしたというか。藝大は気楽なところで、入学は少し難しかったと言えるのかもかもしれませんが、先生たちも自由にさせてくれるところがありました。最近テレビで、藝大で教わった山口薫先生(1907-1968)の取材をした映像を見ましたが、非常に懐かしいなと思いました。林武先生(1896-1975)が教授で、山口先生はその下で指導してくれました。山口先生は我々若い者の気持ちをよく察してくれました。

—イタリア留学(1964~1967年)

その頃藝大の聴講生にセコンド・ラッジという、ローマの美術学校を出て年齢も私と同じ人物がいました。彼も30歳前後ででしょうか。たいへん気が合って一緒に旅をしたりしました。私が後にローマに行くことになるので一層親しくなるのですが、私の画集にも彼の写真が出てきます。イタリア国内はいくらでも歩けるし、イタリアを經由してフランスやスペインにも行きました。私の性格もあると思いますが、イタリアで何を学ぼうとか、そういうものは特に考えませんでした。日本のものに関心を持つようになり、留学に持参した絵巻物全集を見ているうちにこいつは面白いなと思いました。吹抜屋台から出てくる色々なコンポジション、構図。それに日本の絵画の自由さを感じました。色んな人間像のあり方を学んだものです。

イタリア滞在中から取り組んだ《ETERE》シリーズは鼻歌を歌いながら色付けをしたような作品です。これより少し前の作品に比べたら全然違う画風です。



林敬二《ETERE I》1967年
油彩、アクリル、キャンバス
98.1×129.6cm
作家蔵

—画風の変遷

通常、何か頭の中に色々なものがよぎっているんです。それをどこかで捕らえる訳ですが、それを色彩オンリーでもっていく。ちょうど音楽の世界ではなく、絵の世界では色の意味ではなく、音そのもの、色そのものという抽象性をダイレクトに掴む、そういう手法になっています。最初はみんな暗澹たる時代がありますが、だんだんそこを抜け出すと今度は明るくなる。明るくなると底抜けに明るくなり、その明るさも2、3種類ある。ちょうど音楽もそうです。背景や雰囲気、後ろに何があるのか、何が見えるのかということを感じさせる音楽と、それらとは全く異なり音そのものが目の前に浮遊する、そして存在を示し、それが全てという音楽と。音楽は好きです。制作の時に聴い



林敬二《アダム'87》1987年
油彩、キャンバス 145.5×145.5cm 作家蔵

ている時もあるし、うるさく感じる時もあります。そうかと思うと音楽が鳴っていないと自分の絵が描けないということもあります。勝手気ままですよ。その勝手気ままなところが作り手の精神の自由を物語る。音楽の趣味は、曲の流れでいうと、必ずある種のコントラストがあります。激しさ、そして緩さが交互に現れる。

—浮遊感

浮遊感というのはある種の自由であり、想像もつかないところへの移動。そういうものが非常に好きで、大事にしています。時代が変わってもそういう好みは一貫しています。

—色彩

今見返しても、同じモチーフにしても周りの風景にしても、色を統一して形の形態感を統一していく。そういうことも一つの音楽をつくる動機と似ています。同じといえば同じだし、違うといえば違う。そういう好き勝手なものです。

—人物

人が出てくるから人物が見た風景といえますし、人物がいなくてもそこには人が存在します。人がいなければそこに物事が起きない、発生しないという、そういう考え方があります。また人物が活躍する絵であっても、別に人物がいなくてもそれは絵が成せる技で存在しうる訳です。「曰く言い難し」という言葉があります。これは日本の俳句とか詩でいうようですが、曰く言い難い世界、それが俳句なり短歌なり書画になっていきます。その辺でうろろろするのが芸術家なんですよ。



林敬二《淡々・アイボリーブラック I》1994年
テンペラ、キャンバス 201.0×257.5cm 横浜美術館所蔵(林敬二氏寄贈)

—横浜市民ギャラリー所蔵作品 《横浜港》、《緑風根岸》

《横浜港》は横浜駅の待合室の一番海側に行って「これはいい、こんな横浜は初めてだ」と写真を撮り、制作し

ました。忠実に描いたんですよ、横浜港のあり方を。一番奥に橋(横浜ベイブリッジ)があるでしょう。これはまだ完成していません。右手をずっと辿っていくと桜木町のエリアになります。人物は私好みの女性像を描き入れました。この作品ができた時に「やった、できた」と思いま



した。というのは1点くらいは横浜を描いた作品があってもいいのではという思いです。この作品は描いてよかったと思っています(p.6、図版12)。もう1点の《緑風根岸》は根岸の競馬場を意識して描きました。

林敬二《緑風根岸》1988年
油彩、キャンバス 72.5×60.5cm

—変わらないもの

変わらないもの、そういうものがあるからこそ今日ここにいます。今まで歩んできたものの全てを内蔵しているのが私の仕事、マイワークです。

¹ 1873~1946年まで横浜市中区にあった旧制小学校。
² 洋画家・川村信雄(1892-1968)が現在の南区弘明寺で主宰していた。

林敬二 (はやし・けいじ)

- 1933年 横浜市鶴見区生まれ
- 1952年 神奈川県立緑ヶ丘高等学校卒業
- 1954年 東京藝術大学美術学部油画科入学
- 1955年 初個展(小市画廊/横浜)。臨済宗円覚寺で接心する
- 1958年 東京藝術大学美術学部油画科卒業、同油画専攻科に進む
- 1959年 第27回独立展初出品
- 1960年 東京藝術大学美術学部油画専攻科修了
島田章三と横浜造形研究所を開く
- 1961年 東京藝術大学美術学部壁画研究室助手
第29回独立展で独立賞受賞(翌年会員)
- 1964年 イタリア政府給費留学生として渡伊(~1967年)
- 1979年 女子美術大学助教授(1999年客員教授)
絹谷幸二、奥谷博らと「十果会」を結成、同1回展出品
(以降2018年まで継続出品)
- 1988年 「横浜・上海友好都市提携15周年記念 横浜市美術展」
(横浜市民ギャラリー、上海美術館) ※《横浜港》、《緑風根岸》出品
- 1990年 「林敬二の世界展」(池田20世紀美術館、静岡)
「横浜・オデッサ美術交流展」(オデッサ東西美術館/ウクライナ)
※《横浜港》出品
- 1992年 「両洋の眼・現代の絵画」展(日本橋三越他、以降2009年まで継続出品)
- 2003年 相笠昌義、伊藤彬らと「朱苺会」を結成、同1回展出品
(以降2017年まで継続出品)
- 2007年 「ニューアート展2007 Visions 林敬二と3人のアーティスト
—森本洋充・マコトフジムラ・安美子」(横浜市民ギャラリー)
- 2008年 横浜文化賞受賞

上記の他個展、グループ展、受賞多数。現在、女子美術大学名誉教授

作品リスト

作家名	作品名	制作年	技法	サイズ(縦×横)cm
1. 写真でみる戦後－昭和のミナト 横浜				
五十嵐英壽	ハマの三塔	1953	ゼラチン・シルバー・プリント	47.6×31.9
五十嵐英壽	宝塚ジェンヌ	1956	ゼラチン・シルバー・プリント	55.9×45.6
五十嵐英壽	大桟橋満席	1966	ゼラチン・シルバー・プリント	31.9×47.6
奥村泰宏	桜木町駅前	1953	ゼラチン・シルバー・プリント	44.2×28.9
奥村泰宏	出航の見送り	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	52.5×34.0
小野肇	建設中のベイブリッジ	1988	カラー・プリント	56.3×46.0
小野肇	横浜駅と港を望む	1988	カラー・プリント	56.2×45.8
杉船久郎	本牧埠頭	1988	カラー・プリント	43.4×53.4
杉船久郎	ミナトよこはま	1988	カラー・プリント	43.4×53.4
鈴木健夫	船上のピアガーデン	1988	ゼラチン・シルバー・プリント	36.5×55.9
常盤とよ子	赤線地帯－横浜	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	25.4×39.1
常盤とよ子	風呂帰り	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	39.9×25.9
西村建子	横浜港	1988	カラー・プリント	36.5×54.5
西村建子	MM21 夕風	1991	カラー・プリント	39.9×54.7
浜口タカン	最後の移民船	1973	ゼラチン・シルバー・プリント	36.7×49.9
浜口タカシ	最後のSL D51	1975	ゼラチン・シルバー・プリント	36.8×49.9
林忠彦	水上機の格納 横浜	1941	ゼラチン・シルバー・プリント	31.1×20.3

2. 描かれた横浜港 1940～80年代

天笠義一	横浜港	1982	油彩、キャンバス	97.8×130.8
今関一馬	横浜港遠望	1988	油彩、キャンバス	73.5×91.0
岩田栄之助	終戦後の横浜港	1947	油彩、キャンバス	65.6×80.5
遠藤典太	港の見える丘公園 (2)	1979	鉛筆、水彩、紙	24.3×35.1
岡村芳男	港 今昔 (1952年・1988年の横浜港埠頭)	1988	油彩、キャンバス	123.0×73.0
川島実	横浜港	1971	油彩、キャンバス	45.5×60.6
國領經郎	完成近いベイブリッジ	1988	油彩、キャンバス	80.4×116.7
古川益弘	高島台より港を望む	1979	墨、水彩、紙	23.8×32.2
森兵五	港の市街	1955	油彩、キャンバス	131.0×161.2
森田訓司	タンカー船の見える風景 (本牧沖)	1979	コンテ、紙	29.8×42.9

3. 水辺と人びと

石踊紘一	インド追想 (山下公園・インド水塔)	1988	紙本着彩	116.8×116.6
市川勉	横浜税関構内風景	1988	油彩、キャンバス	100.6×100.4
加山四郎	港 (船の絵)	1971	油彩、キャンバス	130.4×162.5
櫻庭彦治	横浜・山手 (外人墓地と港)	1963	油彩、キャンバス	111.8×161.3
田中岑	窓外港 朝	1988	油彩、キャンバス	72.7×60.8
土井俊泰	朝の埠頭	1988	油彩、キャンバス	91.2×117.0
林敬二	横浜港	1988	油彩、キャンバス	91.0×116.0
三橋兄弟治	港にて	1940	水彩、紙	57.0×74.7

特別展示 牛田窪村の描いた横浜－開港期の風景

牛田窪村	藁街の夕 (「蟹港二題」より)	1926	絹本着彩	63.0×112.8
牛田窪村	蜜船の泊 (「蟹港二題」より)	1926	絹本着彩	62.1×112.9
牛田窪村	関内	1926	絹本着彩	63.4×100.5

4. 港と水辺 アラカルト－版画と漫画の多様な表現

相笠昌義	山下公園の日曜日	1988	エッチング、アクアチント	30.0×73.9
岩見禮花	浦波 A	1987	木版	80.1×54.8
岩見禮花	浦波 B	1987	木版	80.1×54.9
清塚紀子	航跡 1992-B	1992	エッチング、アクアチント、シュガーアクアチント、コンデッサー、チューブ、はんだ、鉛筆、紙	95.0×64.4
柴田昌一	MM21 (A)	1988	エッチング、アクアチント	29.2×37.9
柴田昌一	MM21 (B)	1988	エッチング、アクアチント	38.0×28.7
杉浦幸雄	洋行帰り	1978	墨、水彩、紙	102.4×72.3
園山晴巳	HIKAWA MARU YOKOHAMA	1988	リトグラフ	82.0×57.6
田嶋宏行	夜の埠頭	1988	木版	88.2×58.8
ちばてつや	暗闇に黒船	1978	水彩、マジック、木、糸、紙	72.6×102.7
萩原英雄	浜の月	1988	木版	60.8×45.9
萩原英雄	港風景	1988	木版	60.9×46.0
馬場橋男	遊覧船	1979	リトグラフ	18.2×27.5
馬場橋男	暁の大黒大橋	1981	リトグラフ	27.5×37.2
柳原良平	運上所と英一番館	1978	ポスターカラー、紙	72.1×102.4
由木礼	MM21 Pier	1988	木版 (水性多色刷り)	48.9×66.6
由木礼	MM21 Plaza	1988	木版 (水性多色刷り)	64.7×46.6

謝辞

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。(敬称略)

天笠一則	西村建子
五十嵐英壽	萩原襄
岩田順	浜口隆子
牛田雅彦	林敬二
栗林阿裕子	古川益弘
櫻庭慎吾	由木浩子
佐々木勲	
柴田昌一	
田中良	株式会社美術著作権センター
ちばてつや	國領經郎顕彰会
永峯千尋	特定医療法人財団 慈啓会
新納憲司	有限会社ちばてつやプロダクション

展覧会情報

横浜市民ギャラリーコレクション展2020

うつつ、描かれた港と水辺

Landscape of Harbor and Waterside,
Mainly in Yokohama

横浜市民ギャラリー

2020年2月28日(金)～3月15日(日)

10:00～18:00 (入場は17:30まで) 入場無料 会期中無休

横浜市民ギャラリー展示室1、B1

主催：横浜市民ギャラリー

(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体)

関連イベント

■ワークショップ

「木版画摺り体験 摺りであらわす水辺の情景」

2月29日(土) 14:00～16:00

会場：横浜市民ギャラリー 4階アトリエ

講師：関淳一(横浜美術館主席エデュケーター)

対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)

■学芸員によるギャラリートーク

3月7日(土) 14:00～14:30

会場：横浜市民ギャラリー展示室1、B1

■鑑賞サポーターによるトーク

3月8日(日)、14日(土) 14:00～14:30

会場：横浜市民ギャラリー展示室1、B1

本展では8名のボランティアが鑑賞サポーターとして活動しています。事前研修を5回おこない、作品に登場する横浜の建造物などの紹介文(会場内に掲示)を執筆しました。また、上記日程でトークを開催します。

鑑賞サポーター

青木裕子、小峯恵理子、佐藤秀治、佐藤祐介、

柴田悦美、長尾京子、三橋泰子、山田稔

■ハマキッズ・アートクラブ

横浜市民ギャラリーまると探検ツアー

3月8日(日) 10:30～11:30

会場：横浜市民ギャラリー展示室、収蔵庫ほか

対象：小学3～6年生

学芸担当：齋藤里紗、大塚真弓、河上祐子、横田佳子

執筆：齋藤里紗

デザイン：宮川洋平(bulwark)

印刷：株式会社野毛印刷社

インタビュー映像制作：播本和宜

編集・発行：横浜市民ギャラリー

(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体)

〒220-0031 横浜西区宮崎町26番地1

TEL 045-315-2828 FAX 045-315-3033 <https://ycag.yafjp.org/>

©Yokohama Civic Art Gallery 2020

